

2006.08.03
九州大学オープンキャンパス

【模擬講義】

察する
— 行為の原因を知ること —

長野 剛 (認知心理学)
九州大学高等教育開発推進センター

自己紹介として、私の関心事についてお話しします。それは、「なぜ、私たちは同じモノ・コトを見聞きしても、互いに異なった意味づけをし、時には正反対の判断をするのか？」ということです。

この模擬講義では、人それぞれに異なった心由来している行為の原因を推察しようとするときに、私たちが見落としがちな心の仕組みについて紹介します。

他者について知ろうとするには、自分が用いる眼差しの特徴について知っておく必要があるという話です。

「観察」には、「観る」過程と「察する」過程があります。

哲学で思弁的に採りあげられている課題に、物理学の方法を用いて取り組もうとして誕生した心理学のモデルは物理学ですが、物の性質や物の現象の背景にある法則を解明しようとする物理学とちがい、人間の行為の背景は推測（察する）より他なようです。

人間の行為に法則を見いだしたとしても、その法則が当てはまる人間も状況も、かなり限られているのです。

観察とは？

観察とは、**観て**得たことを手がかりにして
(観えないこと)を **察**すること

<p>観る</p> <p>↑</p> <p>物理学 (物の理学)</p> <p>観る対象 自然現象</p>	<p>察する</p> <p>↑</p> <p>心理学 (心の理学)</p> <p>察する対象 人間行為</p>
---	---

演習問題 (1)

何が隠されている何かを**察する**という演習です。

- 3本のストライプで隠された何かの写真をお見せします。
- ストライプを1つずつ外していきます。何が隠されているかを**察した**人は、答えをノートに書いたら、すぐに挙手してください。
- 隠されている何かを正しく言い当てた (察した) 者のうち、早いほうから5名がポイントを獲得することにします。

この演習問題は、意図的に、皆さんが試験問題を解くという状況で受ける負荷を、ストレスサーとして想定して作成しました。

まず、(a) 正答があるので、勝手に、あれこれ想像しても駄目だという負荷です。次が、(b) 制限時間が設けられており、時間内に、できれば、他の者よりも早くと、せかされることによって生じる負荷です。それから、(c) この問題が解けるなら、点数が与えられるということで、自分の能力が評価をこうむるという負荷です。



「これはペポパと言って、ミャンマーの山中に生息している動物で、天然記念物に相当するくらいに珍しい動物です」などと想像力を楽しみたいところですが、ストレス（a）をはねかえさなければならぬので、そうはいきません。

正答を隠しているストライプが広すぎるので、直線と二次曲線で囲まれた面積を求めようとしても、直線の傾きも二次曲線の定数も与えられていないというような状況です。

さて、どうしましょう。



1本のストライプがはずれたのに、これといって観えてくるものはありません。だから、新たな察しが働くわけではありません。もっとストライプをはずしてほしいと思うのは、他の部分を観たいからです。

もし、誰よりも早く言い当てようと思うと、ストレス（b）が知らず知らずのうちにストレスになります。

草の特徴から、動物の生息地域は寒帯ではないとか、耳の形から、ウサギではないとか、タヌキの可能性もあるし、動物の子どもかもしれないなどと、答えの的を絞ろうとします。

当てずっぽうでいいなら、試しに、いくつか答えてみるという方法もあります。

しかし、多くの者は、ストレス（c）に対処しようとして、このストライプがはずれされたら、即座に答えられるように備えようと構えるものです。

一人、二人と挙手が続くと、ストレス（a）（b）（c）を区別する余裕がなくなり、「（これだけの手がかりで察しが働くな）うそだろう」とか、「大変だ」「困ったなあ」「もう駄目だ。10名以上が手をあげた」などと焦りがちです。



演習問題 (1) に取りくむ様子を観て、察すること

正答のある問題を解くということは、「(答えが) 分かりますか?」と尋ねてくるストレスサーに対処する練習なのかもしれない。だとすると...

- 1) 受験勉強が退屈になることがあるのはなぜかについて、説明できるのではないか。
- 2) 受験勉強を積み重ねるうちに、ストレス・トランス(ストレスに耐える力)が、つくということも、説明できるのではないか。
- 3) 受験勉強が楽しい者は、好奇心や驚きに基づく学びでなく、ストレスサーを撥ね返す力を培っていることを愉しんでいるのではないか。
- 4) 社会に参画してこむるストレスは、受験勉強のストレスとは性質が違うのではないか。
- 5) だから、勉強ができる者が、必ずしも社会性があるとは言われないのではないか。

「この問題が解けますか」、つまり「答えが分かりますか」と尋ねられるだけでなく、「制限時間内に」、しかも、「点数をつけます(評価します)」と言われ続けるうちに、丁寧に観て、背景を察するどころではなくなります。そうこうしているうちに、私たちの観て察する力(洞察力)は、さびついてしまいます。

大学には、ストレスサーから開放されて学ぶ機会が無尽蔵に用意されています。しかし、入試をクリアしなければならない高校生にとり、好奇心や想像力に基づいて学びを展開するのは、不慣れで難しいにちがいないと想います。

演習問題 (2)

仲間に分けるにあたり、その分類基準を**察する**という演習です。

- ・これから、13の絵をお見せします。
- ・13の絵は、もともと仲間分けされていた絵を、ばらばらに置いたものです。
- ・すばやく、ばらばらに置かれる前の仲間分けを見つけてください。
- ・(手がかり) 13の絵は、A・B・C・Dの4群に分けられ、A群には4枚の、B群、C群、D群には各3枚の絵があります。

演習問題 (2) は、概念形成に関する問題です。答えを見いだすと、それがあまりにも単純なので、この演習問題には、何か裏(ひっかけ)があるのではないだろうかと用心する人がいるかもしれません。

仲間に分けてください



では、仲間に分けてみてください。

ただし、演習問題の文中にある(手がかり)は無視してもかまいません。むしろ、答案用紙に設けてある空欄の数のような(手がかり)は、無視した分類が望まれるのですが、それでは、採点のしようがないので、試験問題にはならないということです。



他にも分類の仕方があるかもしれませんが、与えられた（手がかり）を満たしているので、この分類は減点のしようがありません。

大学に入学したばかりの頃は、議論をしていて意見が対立すると、「そもそも定義がちがっているから」と互いに納得し合い、「どうして、定義がちがっているのか」と、考えたりしないものです。モノの場合は、ともかく、人間の場合は、なぜそのように互いの定義づけが異なっているかについて、その理由をさまざまに察することも、思考になります。



同じ演習課題(2)を幼稚園児にやってもらったところ、牛乳やハムやトマトが冷蔵庫の仲間になりました。帽子とマイクがバスの仲間になったのは、ワンマン・バスの運転手さんがマイクのついた帽子をかぶっているからだそうです。

大人がもっている概念が、まだ、あたりまえになっていない幼稚園児の分類が、どこかしら生き生きしているのに対して、電気製品とか食料品といった分類は、発想が豊かだとか柔軟性があるとかいうわけではありません。根気強い幼稚園児は、ジャケットと電気釜を仲間にしようとして、哲学者にもなります。

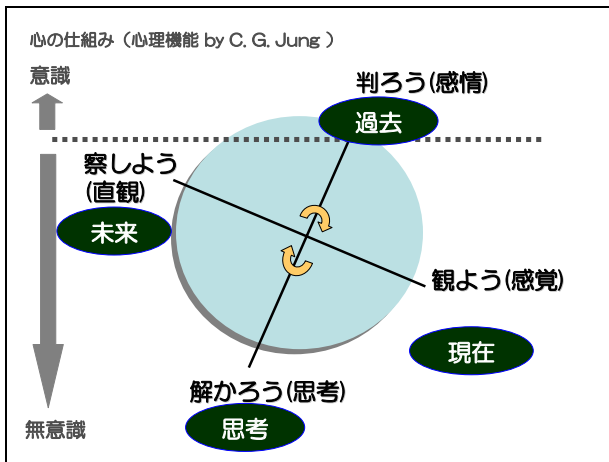
決して「(正答を目指す) 受験勉強は、つまらない」と言っているわけではありません。

しばしば「自分で考えましょう」と促されるのですが、その本意は「問題集の後ろの解法を見ないようにしましょう」ということではなく、何事にしろ、自分の体験する世界（さまざまな出来事）を観るときに、自分の五感や感性をとことん信頼するなら、他の者には観えていないことや大勢が観落としていることが観えてくることがあり、そうして観えたことがらを手がかりにして察しを働かせると、〈洞察〉につながる可能性がありますと言いたいのです。

演習問題（2）への取りくみを観て、察すること

小説はもちろんのこと、公の文書であっても、誰もが同じように解釈することのできる文章は書けないものです。だとすると...

- 1) 幼稚園児よりも大人が、物事を〈きちんと〉考えているというのは、発想や思考の柔軟性を犠牲にしているからではないか。
- 2) 発想や思考の柔軟性を犠牲にする結果、感受性や五感のような主観的な体験は、ないがしろにされるのではないか。
- 3) 主観的な体験を〈しかたなく〉ないがしろにする結果、おしなべて、「人生は何事も勉強が大切」と片付けてしまっていることに疑問を感じなくなっているのではないか。
- 4) はたして、おしなべて定義づけ（共有する概念）を当てはめることによって、独創的な思索や学びが到来するのだろうか。
- 5) 物事を観る前に、概念のような枠があると、観えるものが限られてしまうのではないか。

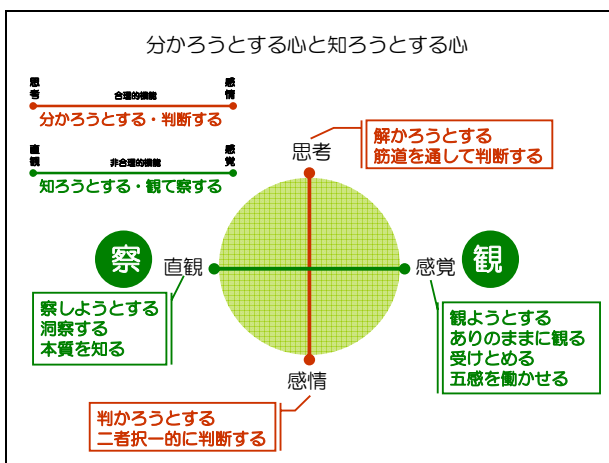


C. G. ユングが観察した心の仕組みを、私の考えを交えて、イラストふうにししました。

時間に追われているときの私たちは、何はともあれ「判ろう」とします。公式や法則を、その由来から「解かろう」とする余裕がありません。正しい・間違い、優れている・劣っている、などと判るだけなら、判った結果を教わるだけでいいのですが、大学での学びは、物事を精確に観ようとする学びです。さもないと、観たことに基づく察しが当てにならないからです。観ようとする感覚機能と察しようとする直観機能の間の往復が、解かろうとする思考機能になるというわけです。

「経験は学びを妨げる」とか「もの分りがよい者とは、何も学ばない者である」という指摘がなされます。このことを心理機能にそって説明してみます。

経験があると、役立つかどうかの判断ができますが、役立つと判っていることをのみ観る（感覚する）ことになりますから、察し（直観）を働かせる資料が偏ってしまい、最初から結論があるかかのような行為が繰り返されます。もの分りがよいというのは、もの判りがよいことです。解かろうとするなら、よく観て広く深く集めた資料をもとに察しを働かせることになります。



演習問題（3）


これは、印象形成についての古典的な心理学実験を簡易にした紹介です。

- ・ある人物の顔写真が提示されます。
- ・写真に加えて、この人物について、職場の同僚がもっている印象の典型的な例を、人物情報として添えます。
- ・顔写真と人物情報から、あなたなりに、この人物のパーソナリティについて（正答はありませんから、自由に）想像してください。

私たちは、出遭う人々について、何らかの印象をもっています。そして、それらの印象はAさんやBさんやCさんのパーソナリティ（人となり）の一端であると思っています。はたして、本当にそうなのでしょうか。

計測機器を用いて測定できるモノとちがって、人の心は測定困難ですから、人は人の心を察しています。察するとき、どのような要因の影響を受けているかを明らかにするのは心理学の重要な課題です。

A群



人物情報

- ・温かい
- ・知的な
- ・勤勉な
- ・決断力がある

実際には、一人の者は、A群かB群のいずれかで、顔写真の人物のパーソナリティを思い描きます。

写真を観て、かつ、人物情報を読んで、どのような人物か想像してみてください。

この問題は、想像力にかかわってきます。

B群



人物情報

- ・冷たい
- ・知的な
- ・勤勉な
- ・決断力がある

同じ写真ですが、人物情報がA群と異なっています。

写真を観て、かつ、人物情報を読んで、どのような人物か想像してみてください。

印象形成の傾向

A群の人物情報	B群の人物情報
<ul style="list-style-type: none"> ・温かい ・知的な ・勤勉な ・決断力がある 	<ul style="list-style-type: none"> ・冷たい ・知的な ・勤勉な ・決断力がある
<p>親切 / ユーモアがある / 親しみやすい / 部下思い / おおらか / 失敗を許してくれる</p>	<p>冷静 / めったに笑わない / 近づきにくい / 自己中心的 / 厳しい / えこひいきする</p>

たとえば、ある高校生が、A高校の生徒ですと紹介された場合とB高校の生徒ですと紹介された場合とで、他者が形成する印象は異なってきます。なぜなら、A高校とB高校のイメージが異なっているからです。

この印象形成の実験は、人物情報に「温かい」と「冷たい」のいずれが含まれているかによって、察せられる人物像が別ものになることを明らかにしました。「温かい」かつ「知的」ならユーモアがあり親しみやすい人物、「冷たい」かつ「知的」ならめったに笑わない近づきにくい人物というように、私たちの察しは心許ないのです。

演習問題（3）の結果から、察すること

物事を、特に、人間をありのままに観ることは不可能ではないだろうか。だとすると...

- 1) 人間（の行為）を察するとき、察したことが、どのくらいの射ているかどうかよりも、どんな道具（視点）を用いて、観察したかを確かめることに意義があるではないか。
- 2) 月の写真ならともかく、空の月を観察するのに虫眼鏡は用いない。顕微鏡も用いない。けれども、人間の行為は、世間一般のイメージというような道具（視点）を用いて観ており、そうした視点で観ることによって得られた資料を、察しを働かせて検討することによってたどりつく洞察は、知識と言えるのだろうか。
- 3) 大学で学ぶには、まず、手持ちの観察の道具を吟味し、時としては新たな道具を自ら開発する必要があるのではないか。
- 4) 観る道具（方法）を新たにすると、察する対象も新たになるのではないか。このことが、大学で学ぶということではないか。

スタンバーグの3つの賢さ

Sternberg, R.J. 1996. Successful Intelligence : How practical and creative intelligence determine success in life

- ① 分析的に考える賢さ **自らが観て（自ら調べ直して）得た資料を、適切な順番で、筋道を立てて、論理的に考える力。**
- ② 創造的に考える賢さ **自らの察しを働かせて、それまで見落としていたことに気づいたり、一見無関係な物事の間に関係を見つける力。**
- ③ 実践的に考える賢さ **分析的に考えたことや新たな気づきを、実際の生活や現象に適用を試みる力。**

ガードナーの7つの賢さ

Gardner, H. 1999. Intelligence reframed : Multiple Intelligence for the 21th Century

- ① 言葉を自由自在に使いこなす賢さ
- ② ものごとを論理的・数学的に考える賢さ
- ③ 音楽を楽しむ賢さ
- ④ 空間の位置関係を把握する賢さ
- ⑤ スポーツやダンスなど身体知を発揮する賢さ
- ⑥ 他者の気持ちを想像する賢さ
- ⑦ 自分の感情判断をコントロールする賢さ
- ⑧ 自然界の現象を記述する賢さ
- ⑨ 人間の存在や人生そして死を考える賢さ

たとえば、子どもが、ある学生のことを「お兄ちゃんは、ケチだね」と言ったとします。ケチは悪いことだと判っていると、「ガキに、そんなことを言われる道理はない」と感情的にならざるをえません。

しかし、観察に長けてくると、「ケチって、どんなことなの」「ケチでないところはあるのかなあ」と尋ねて、その子どものケチ概念はどうなっているのだろうと問いを立てて、とことん知ろうとするようになります。知らずして判ったつもりになることを回避するようになります。

賢くあろうとしている私たちは、大学で学ぶことによって、人生をより賢く生きようとしています。大学で学ばなくても賢く生きている人は大勢います。たとえば、大工仕事を専らにするうちに、建築中の家の柱を観て、階段の踏みしろの幅や段数について察しがつくようになります。さすがです。大学で学ぶうちに、専らにしようとしていること（専門領域）についての察しが、いくぶんかは働くようになります。

分析的、創造的、実践的賢さは、大工も大学教師も、どのような職業であっても、同じく目指すところなのです。

スタンバーグの賢さは、心の賢い働かせ方ですが、このガードナーの賢さは、賢い心を取りくむ課題を整理したものです。

受験の教科とは対応していませんが、これら21世紀を生きるうえで、知的な賢さの発揮のしどころとされた課題については、高校生の皆さんも大学教師も獲得途上にあるという点で、同じ土俵にあがることとなります。

大学のカリキュラムでいうと、教養教育の授業が、ガードナーの言う7つの賢さを鍛錬する機会に対応しているのかもしれませんが。

理系型人間と文系型人間という分類

理系（人間）のイメージ	文系（人間）のイメージ
4.32 数学が得意	5.04 文章力がある、語彙が豊富
3.98 計算力がある・数字に強い	4.98 数学が苦手・嫌い・弱い
3.26 理科の教科が得意・好き	4.57 答え（結論より）プロセス重視、考えるのが好き、明確な判断をしない
3.23 明確な答えを求める	4.51 本（読書）が好き、活字が好き、文学作品を読む
3.21 論理的・理論的・分析的	3.22 国語が得意・好き
2.18 物理の教科が得意・好き	3.15 英語が得意・好き
1.97 化学の教科が得意・好き	3.14 理科の教科が苦手
1.88 人間関係が苦手	3.09 社会が得意・好き
1.85 物事に独力で取り組む	3.02 暗記力がある・得意
1.85 男性的	2.24 社会の出来事に興味がある
1.74 結果を重視する・功利的	
1.69 頭の回転が速い	

問題：観察なしに、できあがったイメージをどう解消するか？

ステップ④ 察するまでもないのだけど...



最後に、関心の幅を広げることを妨げている問題を紹介します。

学生はしばしば「僕（彼）は理系（文系）人間だから」などと話をしています。そこで、文系人間と理系人間の区別が、どこから生じているかについて調べてみました。すると、受験勉強や入試でどの科目を選択したかで、自分も含めて人間を分類しているようです。奇妙なことに思えます。

この分類には、実際の行為の観察とは相容れない面があります。もしかして、日本の世間や学校が、そういう分類をしているというだけのことかもしれません。

この写真を観せられると、察する余地はなくなります。察することなく、「ライオンだ」と。

皆と同じように「ライオンだ」と判ることが、大学での学びにおいて大切なわけではありません。観えない部分が大きいときに、どれくらいの想像を展開できるかが、未知の事柄の解明に取り組むにあたって重要です。

もし、ライオンにはたてがみがあると判っていたなら、それは、メスのライオンを除外した先入見の影響を受けていたことになります。すでに判っていることを組み合わせても、想像や洞察にはならないと思えます。